

## 幻想バロックオペラの神髄

チエコの「チエスキー・クルムロフ城内バロック劇場財団」主催の国際会議「バロック劇場の世界」が2〜4日に開催された。各国の研究者が広範な研究発表や情報交換をするともに、極めて示唆に富む「バロックオペラの実験的上演」が行われた。

同城内には1766年に建てられた城内劇場が復元され、バロック時代のウィーンの劇場文化を今日に伝える機械装置、照明、衣装などもそのまま保存されている。この劇場で今年上演されたのは、ウィーン宮廷副楽長A・カルダーラのオペラ「將軍シビオ・ネ・アフリカー」だった(2日、非公開)。

18世紀半ばまで絶大な人気を誇ったバロックオペラはやがて衰退し、消滅した。そして今再び、ブームが起りつつある。今日の上演は、状況設定を現代

に置き換えたモダンな演出によるものが多い。

しかし、バロックオペラ復活のためには、当時の聴衆が何に熱狂していたのかを、彼らと同じ目線でとらえ直す必要がある。当時のままに劇場空間を再現することで、熱狂の理由が分かるのだろうか。プリマ・カストラートの超絶的・圧倒的な歌唱のほかに、どんな要素が人を魅するのかわ。

下からほの暗い灯りで人物を妖しく浮かび上がらせる蠟燭。精巧な機械装置を使った宮殿の大広間から緑の森への一瞬の場面転換。転換過程で前後の場面の異なる万華鏡のごとき幻視的効果、古楽器の典雅な響き……。

その空間にきびやかな衣装をまとった歌手たちが現れて見せるのは一見、抑制的で、様式化された優雅な身ぶりの中に、深く激しい感情が凝縮されたバロックジェスチャー。バロック期の彫刻さながら足、胴体、首をことさらに捻る。腕や手首もねじ曲がり、指先や顔に湛えられた表情は、意味ありげに訴えかけてくる。

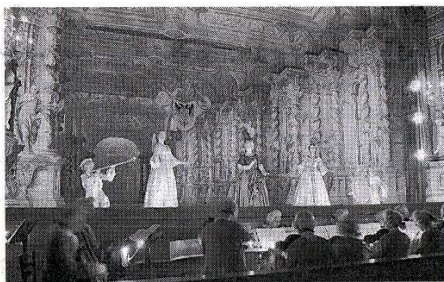
これらが一体となって作り出される「幻想の世界」。こそ、当時の聴衆を熱狂させたバロックオペラの神髄なのである。

(三澤寿喜・ヘンデル研究者、北海道教育大学函館校教授)

実験上演されたバロックオペラ

「將軍シビオ・ネ・アフリカー」

ノ 三澤氏撮影



## Around the World